時にはいじめっ子をかばったりすることが注目される。

いじめを教師や両親に「チクル」と、さらにいじめがエスカレートするのではないかということがある。いじめられていることを打ち明けられても、教師や親は、それでいじめがエスカレートすることは絶対にないと保証できない。できるとすれば、いじめられっ子をそのような状況から離すしかないだろう。

しかしそれでは、いじめられっ子にとっては、敗北を意味するかもしれないし、自尊心の低下、寂しさといったような複雑な気持ちを生じさせやすい。

教師や両親の援助を求めるということはまた、「弱いこと」、「子どもであること」の証であるとも感じられるだろう。特に中学生や高校生ともなれば、「自立」とか「強い」ということは差し迫った課題となるからである。いじめられること自体、彼らにとっては「弱い」、「自分が駄目だから」として体験されがちであるので、成人へ援助を求めるということにはより一層抵抗がある。

最後に、いじめられるという代価を支払ってでも、彼らも仲間集団に所属したいという強い欲求があることが挙げられる。ある意味では、いじめられても彼らは仲間意識があり、仲間が好きなのである。このことは、虐待を受ける子供が、親を告発せず、秘密にしておこうとすることと類似したところがあるだろう。

三、「いじめ」の臨床心理学的援助

それでは、いじめについてどのような臨床心理学的援助ができるだろうか。いじめられっ子の援助として、三つのステップが考えられる。

第一のステップは、「いじめは、絶対に許されないことである」ということを徹底させることである。そのためには一時的に、いじめの状況から引き離すことも必要となるだろう。

第二のステップは、いじめられ体験から生じた不安、恐怖、身体的反応といったことを軽減するように援助することである。またいじめられっ子は、いじめを自分に原因があると信じていることがあり、この段階で自尊心を回復することが欠かせない。

第三のステップは、必要ならば友人関係を初めとして種々のソーシャル・スキルを身につけるように援助することである。

また、いじめられっ子だけでなく、いじめっ子への援助ということも忘れてはならない。いじめっ子が心理臨床家の所に相談にくることは、あまりない。しかし、「いじめ」、「いじめられ」はコインの裏表であり、いじめられっ子がいじめっ子になることも希ではない。また、いじめっ子のいじめ意識の希薄さということからすれば、彼らにも援助が必要である。

最後に、われわれ自身が、自分に潜む「いじめ」をさらに深く自覚することである。というのは、子どもの種々の問題行動は、社会の歪みを鋭敏に映し出しているからである。いじめは、子どもから現代社会へ向けられた警告ではないだろうか。

プロフィール

（いちまる・とうたろう）
◇教育学部心理学科助教授
◇昭和十九年生まれ
◇専門は臨床心理学
◇趣味はジャズを聴くこと

イジメと学校
―倫理学の視点から―

文学部倫理学教室　❖　越智　貢

一、モラルの欠落？

ある新聞が、先日開かれたイジメに関するシンポジウム（「いじめを考える」七月二十六日県民文化センター）の様子を大きく報じていた。その中で、パネリストの一人が次のように発言している。「今の子どもには優しさや思いやり、正義感、勇気が欠落している。だから、人間関係が希薄になり、他人とかかわらず……（略）」。

優しさ、思いやり、正義感、勇気はモラルのアルファでありオメガだと言っていい。そうしたモラルが、とりわけ「傍観者」に欠落しているからイジメが解消できない、そう彼は主張している。

私はこの主張には同意できない。彼が教育に無縁の人ではなく、現場の教育の責任者だったことを考えれば、なおさらだ。少しだけその理由に言及する。

㈠　モラルは、ある時点で一気に身に備わるものではない。むしろ徐々に育まれ、熟成されていくものだ。子どものモラルがイジメを抑止できるほどに深化していないとしても、それだけで欠落しているなどと言えるはずがない。モラルの「欠落」を「希薄化」と解すべきなら、それは子どもに先んじて、まず大人一般について言いうることだ。

そうした現状を棚上げして、イジメの現場に居合わせたという理由で一方的に子どもたちの希薄なモラルをとがめるのは、フェアな見方とは言いがたい。

㈡　仮に、子どもたちのモラルが欠落しているとしよう。だが、モラルが欠落しているから、人間関係が希薄になるわけではない。むしろ、モラルは人間関係の中で培われる。

小学生や中学生にとって、人間関係の中心は生徒どうしの関係や教師との関係にあるだろう。それらの関係の希薄化が、子どものモラルの熟成を妨げていると言うことはできる。だが、その逆では決してない。

ここでなにより教師が考慮すべきことは、教師と子どもとの関係がモラルの育成を促すのに十全かどうか、という点である。子どものモラルの欠落を主張する前に、そうした反省こそ必要だろう。

㈢　モラルはいつも個別的だ。かならず特定の状況下で発動する。たしかに、「傍観者」がイジメの問題をより困難なものにしていることは事実だろう。だが、だからといって、彼らにモラルの意識が欠落しているとは思われない。彼らにもモラルが発動する場面はいくつもあろう。親しい仲間がいる場所で、あるいは家庭でのできごとの中で、あるいは街角で出会った人との間ですらも。とすれば、問題はむしろ、そうしたモラルが発動しがたい状況、すなわち学校そして学級のほうにあることにはならないか。

二、学校という装置

イジメの原因が学校だけにあるなどというつもりはない。しばしば指摘されるように、家庭や地域とりわけ前者の教育力の低下とイジメの現象との間には、かなり密接な関係があるだろう。その意味で、イジメをはじめとする子どもたちの問題行動の原因が複合的だと考えることに異論はない。それどころか、家庭や地域がイジメの共犯だとさえ言いうるかもしれない。

だが他方で、イジメがどこまでも学校を媒介にして生じている事実も、軽視してはならないと思う。

学校は、もともと子どもたちを、時間的にも空間的にも拘束する構造をもっている。だが、いまではそれにとどまらない。今日の学校は、きわめて特殊な装置になっている。子どもにとって、学校は選択可能な（それゆえ放棄可能な）いくつかの場のうちの一つではなく、いわばそこを司令塔としてすべてが営まれる権威的な中枢と化している。

力を喪失した家庭や地域は、子どもを学校と結びつけることでかろうじて教育力を保っている。こうして、子どもたちはどこへ行っても学校の支配のもとにある。学校から逃れることは、多くの子どもたちにとって、自らの世界を自分自身で否定することにほぼ等しい。

教育に携わる人であれば、学校が、好むと好まざるとにかかわらず、こうした特権的な位置にあること、それゆえ、容易に子どもを抑圧する装置ともなりうることを忘れてはならないだろう。イジメは、この装置の中で起こっているできごとにほかならない。

三、チーム・プレーの学校

話を戻そう。子どものモラルはけっして欠落してなどいない。それは、なにより学校現場から証明できる。たとえば、小規模校に行って子どもの姿を見てみよう。ここには、子どものモラルが確実に生きている。少なくとも、子どものモラルが欠落しているから人間関係が希薄になる、といった論理が妥当しないことが判る。小規模校から学校全般を眺めれば、学校の原点が見えてくる思いがする。

大規模校と比べた場合、小規模校にはいくつか大きな特徴がある。なかでも、授業を含めた教育全般がチーム・プレーの傾向をもっていることは、重要だろう。教師間のチーム・プレーがなければ、小規模校の教育活動は不可能になる。

先日訪れた全児童数五十人ほどの小学校では、ある教師の授業中に、手の空いた別の教師が手伝いに入る。音楽の授業では複数の教師が指導する。異学年の合同授業にしなければ、和声の練習すらできないからだ。

こうした一見変則的な形態は、主に教師や子どもの数が制限されていることからくるものだが、この制約がかえって教師間のコミュニケーションを促進し、子どもと教師との関係の構築にも大きな効果を上げている。さらに言えば、開かれた教室や授業が子どもたちどうしの交流をも深めていく。ここでは、最近注目されているTT（team teaching）が、期せずしてすでに実現されているように見える。

これに対して、大規模校は個人プレーの色彩が著しく強い。それゆえ、教室も閉ざされた空間になりやすい。イジメが事件となった際、責任者の多くが、事件が水面下に隠れていたとばかり「気づかなかった」と弁明するが、これも大規模校ならではの言葉だろう。小規模校からすれば、この言葉は、一人の教師の限界を他の教師が補完できるほどにチーム・プレーが確立できていなかったことの証拠のように聞こえてくる。

私は、なにも小規模校を薦めているわけではない。ただ、学校の中にも教育そのものを見直す契機がたくさんあることを指摘したいだけである。そうした模索をせず、子どものモラルの欠落を嘆くのであれば、それは短絡的な見方であると同時に、場合によっては教育の放棄だ、と私は思う。

子どもとの信頼関係なしに教育が成り立つとは思われない。子どものモラルの欠落の主張は、この信頼関係を教師の側から断ち切ることに通じている。

プロフィール

（おち・みつぐ）
◇文学部哲学科助教授
◇昭和二十六年生まれ
◇専門は哲学・倫理学
◇趣味は子育てとパソコン

まとめ

戦後五十年を迎え、今年の広島の夏は、核のない世界平和の実現を目指し、例年になく熱く過ぎようとしている。今回特集した「いじめ」問題も、戦争のない平和な社会の実現と無関係ではない。

「おとなしい」、「皆とちがう」といった些細な理由で、人間的尊厳を踏みにじるような「いじめ」が、二十一世紀を担うべき子どもたちの社会、とりわけ学校社会からなくならない限り、真の平和の実現にはほど遠いかもしれない。

今、広島大学は、学部改革の一環として教養的教育の改革作業が開始されている。どのような改革がなされようとも、「いじめ」問題等に主体的にかかわることができる豊かな人間性を涵養するような教養的教育の実現を期待したいものである。もちろん、全ての構成員がその実現のための努力を惜しんではならないことは言うまでもない。

最後に、ご多忙の中、本特集にご寄稿いただいた執筆者各位に記して謝意を表する。

（高橋　超（たかはし・すすむ）記）